

被服製作実習における授業改善策の効果に関する検討

成 田 千 恵

1. はじめに

中高家庭科における被服製作実習では近年、内容および時間が削減され、それに伴い生徒の被服製作に関する知識や技術を習得する機会が減少し、大学生の技術の低下が指摘されている^{1), 2)}。一方で、大学において被服製作実習を履修することにより、縫製ミシンおよびロックミシンの操作が向上し、製作実習を重ねることにより「できる」割合が向上することが報告されている³⁾。中高家庭科教員免許取得のためには被服製作実習は必修科目であるため、知識や技術をより分かりやすく習得できる授業内容が求められる。被服製作実習科目における授業改善点とその効果に関する論文については、上記のように手縫いやミシン縫製、ボタン付けなどに関する基礎的知識や技術に関する現状と課題について述べられているものが多い。しかし、立体構成の被服製作に関する改善点について具体的に示したものは加藤ら⁴⁾の報告があるものの、多くはない。

本研究では、被服製作に関する知識や技術の教授法、および授業資料をより理解しやすいものに改善することを目的とし、被服製作実習科目を履修した受講生にアンケート調査を行い、授業時の説明や使用する資料の問題点を把握した。さらに、昨年度にお茶の水女子大学における同授業科目にて実施した授業アンケートの結果⁵⁾を基に、今年度改善した内容が有効であったか比較検討を行い、その効果を確認したので報告する。

2. 対象科目および授業計画

本研究の対象科目は、お茶の水女子大学にて2017年度前期に開講された「被服製作実習」(生活科学部家庭科教職必修科目)である。受講生は5名で、内訳は中高家庭科教職免許を希望する食物栄養学科学生4名、教職免許を希望しない人間生活学科学生1名であった。授業時の受講生の履修姿勢に教職免許希望の有無による差は見られず、全員積極的に履修していたこと、また、教員免許を希望しない学生にとっても、被服製作実習の知識や技術を分かりやすく習得できる授業内容は自身の教養や生活力向上のために有意義であることから、教職免許を希望しない学生もデータ分析対象とした。なお、教職免許を希望しない学生は、昨年度に他の被服実習科目を履修し上衣の製作経験があったため、授業前のロックミシンの使用経験や上衣のパジャマ製作の知識を有していた。

製作した作品は襟付きの前開きシャツとズボンの組み合わせのパジャマとし、市販の型紙を用いた。パジャマ製作には90分×15回の授業のうち11回を充当した。表1に本授業の授業計画を示す。また、2017年度は2016年度の授業計画の一部を改善した(「3. 製作手順に関する工夫、および昨年度からの改善点」を参照)ため、参考までに2016年度の授業計画を併せて示す。授業時の資料は、使用した型紙の製作手順

を基に授業回毎に図や解説を加えて作成し、予習ができるよう、前週に次週の資料を配付した。

授業の進め方は、各回とも授業開始時に、あらかじめ配付したプリント資料、および実物見本を用いた実践による手順や技法等の説明を行った後、各自作業を行った。授業時間中は担当者が机間巡回し個別の質問に対応した。授業中に使用する縫製ミシン、ロックミシンは1人につきそれぞれ1台を使用した。授業時間内に終了しなかった作業内容は、次回までの宿題とした。

表1 被服製作実習 授業計画

| | 2017年度 | (参考) 2016年度 |
|------|-----------------------------|--------------------|
| 第1回 | ガイダンス、人体と衣服 | ガイダンス、人体と衣服 |
| 第2回 | 和服の構成、手縫いの基礎 | 和服の構成、手縫いの基礎 |
| 第3回 | 衣服製作の手順、ミシン縫いの基礎 | 衣服製作の手順、ミシン縫いの基礎 |
| 第4回 | 採寸、型紙の準備 | 採寸、型紙の準備 |
| 第5回 | 布地を整える、パターン配置、裁断 | 布地へパターン配置、裁断 |
| 第6回 | しるし付け | しるし付け |
| 第7回 | 芯地貼り、裁ち目の始末 | 芯地貼り、裁ち目の始末 |
| 第8回 | 胸ポケット付け、肩の縫製 | 胸ポケット付け、肩の縫製、襟づくり |
| 第9回 | 襟づくり | 襟付け |
| 第10回 | 襟付け | 袖付け |
| 第11回 | 上衣の見返しの始末、見返し～襟の端ミシン、袖付け | 上衣の脇の縫製、袖口の始末、裾の始末 |
| 第12回 | 上衣の脇と袖下の縫製、袖口の始末、裾の始末 | ボタンホール、ボタン付け |
| 第13回 | ボタンホール、ボタン付け、パンツの股下の縫製、裾の始末 | パンツの脇、股下の縫製、裾の始末 |
| 第14回 | 股上の縫製、ウエストの始末、ゴム入れ | 股上の縫製、ウエストの始末、ゴム入れ |
| 第15回 | 完成作品発表会 | 完成作品発表会 |

3. 製作手順に関する工夫、および昨年度からの改善点

1) パジャマ製作手順に関する工夫

授業内での作業時間には限りがあり、授業時間以外の作業時間が多くなると、説明された手順を忘れて受講生自身の負担にもなるため、授業時間以外の作業時間が短くなるよう製作手順に関して次のような工夫を加えた。①各パーツの縫い代は型紙に加える、②接着芯は四角に粗裁ちした状態で生地貼付する、③裁ち目の始末は縫い合わせる前に行う、である。

① 各パーツの縫い代は型紙に加える

被服製作手順に関する多くの解説書では、型紙を生地に配置してまち針で留めた後に、縫い代を生地に付けるようになっている。その場合、縫い代を付け忘れて生地を裁断してしまう可能性があり、また、隣り合う型紙それぞれの縫い代を確保するため、間隔を測りながら型紙を生地に配置する必要がある。一方、型紙にあらかじめ縫い代を加える方法では、型紙が重ならないように生地に配置すれば良いため、スケールで測りながら型紙を置く時間が省略できる。

② 接着芯は四角に粗裁ちした状態で生地貼付する

多くの被服製作手順書では、接着芯とそれを貼付する生地はそれぞれ、その型紙に合わせて裁断してか

ら貼り合わせるよう解説している。しかし、小さい面積の生地と同じ形の接着芯を貼付することは、ずれが許されず、被服製作の初心者には難しい。そのため、接着芯と生地をあらかじめ粗裁ちして布目線を合わせて接着し、その後型紙の縫い代線に沿って裁断する方法を採用した。これにより接着芯と生地をそれぞれしるし通りに裁断する手間や、細心の注意を払ってずれないように貼付する労力が短縮できる。

③ 裁ち目の始末は縫い合わせる前に行う

ほつれないよう裁ち目の始末をする場合、縫製後に2枚まとめてロックミシンを掛ける方が見た目も美しく、作業時間も短い。しかし初心者の場合、縫い代以外の布を巻き込みながらロックミシンを掛けてしまうことがあるため、本授業では、ロックミシンによる裁ち目の始末はミシンで縫い合わせる前に、1枚のパーツ毎に行うこととした。

以上の工程に関する工夫は、他の被服を製作する手順とも共通するため、被服製作実習科目全般においても有用である。

2) 昨年度からの改善点

① 配付資料の改善および詳細な実物見本の製作

2016年度に同授業科目(受講生7名)でパジャマ製作後に実施したアンケート結果⁵⁾から、胸ポケット付け、襟づくり、襟付け、見返しの始末、パンツのウエストの始末の項目で、やり直した、配付資料がわかりにくい、あるいは実物見本や写真による手順説明等が欲しいとの回答が挙げられた。そのため今年度はそれらの箇所について、配付資料の手順を細分化して解説し、加えて、実物見本を製作手順毎に別途製作し、授業時の説明に用いた。

② 授業内容の変更

2016年度に行ったアンケートでは、授業8回目「胸ポケット付け、肩の縫製、襟づくり」ではほぼ全員が15~60分の授業時間以外の作業を行っていた。そのため、今年度はこの内容を「第8回 胸ポケット付け、肩の縫製」「第9回 襟づくり」の2回の授業に分け、第13回に「ボタンホール、ボタン付け」に加えて「パンツの股下の縫製、裾の始末」を行った。参考として表1 授業計画に2016年度の授業計画を併記した。

③ 事前の資料配付

昨年度のアンケートにて、授業改善のために事前に資料を配付し予習を行うと良いのではないかと提案があったことから、今年度は説明資料を前週に配付し、予習ができるようにした。

4. 調査方法

本研究では既報⁵⁾を基にした改善策の効果を検討し、次年度に向けた授業改善に繋げるため、パジャマ完成後に受講生にアンケート用紙による調査を行い、その回答を量的に検討する手法を用いた。質問内容は、これまで小・中・高・大学の授業および授業以外で製作した作品について、製作技術レベルの自己評価、製作に対する意識について、縫製ミシンやロックミシン、被服製作に関する基礎的な知識や技術の習得について、授業前後の変化を問うた。加えて、使用した授業資料や実物見本のわかりやすさ、授業時間以外の作業時間、復習の際に被服製作手順をより理解しやすくするために望まれる写真や動画等を用いた説明資料についての要望を回答させた。回答内容についての詳細は、アンケート回収後、15回目の授業にて各自にヒアリングを行った。

5. 結果および考察

5.1 これまでの製作経験や製作意欲

1) 受講理由

受講理由としては、教職取得のための必修科目であるから、講座の副プログラムであったための他に、被服製作技術はこれから先の生活に役立つと思ったから、パジャマが欲しかったという回答が得られた。

2) これまでに製作した作品

学生がこれまでに製作した作品を表2に示す。各作品の回答者数は全て1名であった。2016年度と同様、衣服よりも小物が多く、直線的で基礎的なものが多かった。被服製作経験は中学までと回答した学生が2名いた。シャツやスカートなど着用できる被服製作の経験がある学生は3名であった。

表2 これまでに製作した作品（各作品の回答者数は全て1名）

| | 授業で製作 | 授業以外で製作 |
|-------|---|----------------------|
| 小学校 | エプロン、クッションカバー、クッション、ナップザック、ブックカバー、ウォールポケット、ポケットティッシュカバー | フェルトのスイーツ、フェルトのマスコット |
| 中学校 | トートバッグ、My箸入れ、お弁当包み、アームカバー、エプロン、Tシャツ、アロハシャツ、スカート | ぬいぐるみ、シュシュ |
| 高校 | ポケットティッシュカバー、ランチョンマット、ペットボトルホルダー、エプロン | ダンスの衣装、体育祭の衣装 |
| 大学入学後 | ブラウス | なし |

3) 被服製作の技術レベルと実習に対する意識

製作技術レベルの自己評価（5 高い、4 やや高い、3 ふつう、2 やや低い、1 低い）の問いに対しては、全員が「3 ふつう」と回答した。また、製作に対する意識（製作実習は好きであるに対して 5 そう思う、4 ややそう思う、3 どちらともいえない、2 あまりそう思わない、1 そう思わない）については、「5 そう思う」1名、「5 ややそう思う」3名、「3 どちらともいえない」1名であったことから、被服製作実習に意欲的な学生が多く履修したといえる。

5.2 ミシンに関する学習経験および技術

小学校～大学における縫製ミシンの学習経験の有無について、学習経験があると回答した学生は、小学校では5名全員、中学校では4名、高校では3名、大学では1名であった。半数の学生が高校までミシンに触れる機会があったと回答している一方で、ミシン学習は小学校のみの学生が1名いた。

また、縫製ミシンおよびロックミシンの技術に関する授業履修前後の回答を図1、図2に示す。縫製ミシンでは、授業前に全員が「できる」と回答した項目は「上糸掛け」と「返し縫い」の2項目であったが、授業後には「ミシン針の取り替え」以外は全ての項目において、全員が「できる」と回答した。また、「ミシン針の取り替え」について、授業前は「やったことがない」「わからない」と回答した学生が各1名いた。授業中に実際にミシン針の取り替えを行った学生はいなかったが、それらの学生も授業後には「説明書を見ればできる」と回答し、縫製ミシンに対する技術や「できる」意識の向上が認められた。

大学入学後に他の被服製作実習科目を履修し「ロックミシンかけができる」と回答した1名以外は、全ての項目において「できない」「やったことがない」「わからない」の回答がほとんどであった。高校まで

被服製作実習における授業改善策の効果に関する検討

の家庭科の授業では、ロックミシンに触れる機会がないためであろう。本授業終了後は全受講生が「できる」と回答し、全員がロックミシンかけを習得できたと考える。ロックミシンかけ以外の項目（ミシン針の取り替えや糸かけなど）を学生自身が行うことはなかったが、1名の学生が「説明書を見ればできる」と回答し、ロックミシンについても「できる」意識の向上が見受けられた。

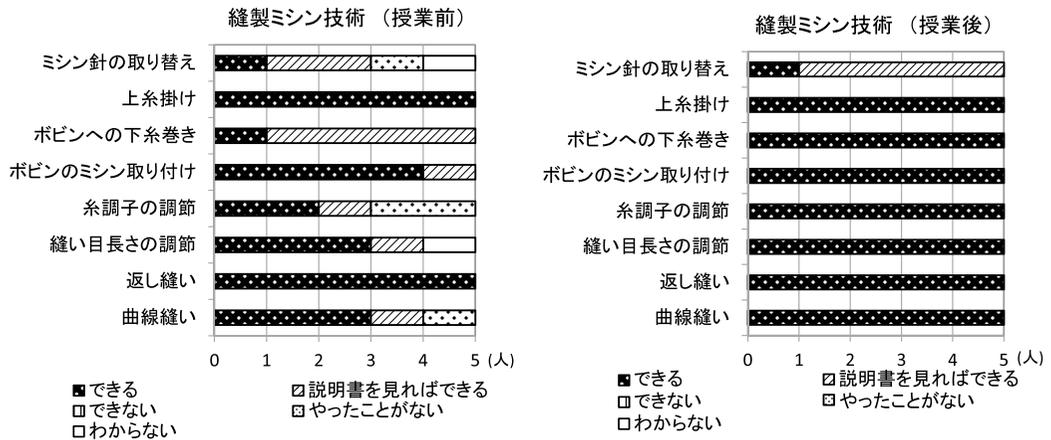


図1 縫製ミシンの技術に関する授業前(左)後(右)の回答

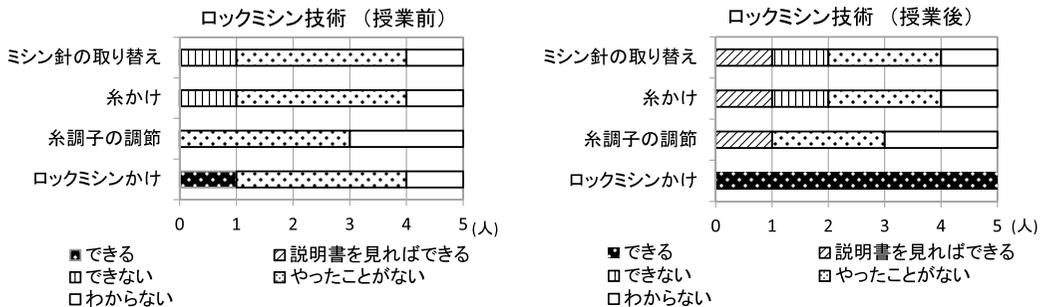


図2 ロックミシンの技術に関する授業前(左)後(右)の回答

縫製ミシン、ロックミシンは共にパジャマ製作にて多くの時間をかけて使用したため、本授業終了時のミシンの技術力は将来教員として指導ができるレベルであると思われる学生がほとんどであったが、そこまで到達できなかった学生も1名いた。ミシン掛けの基本技術については本授業でもパジャマ製作前に確認しているが、その時点でミシンの縫製技術の要点を確実に習得させることが必要であると思われた。

5.3 製作に関する知識と理解・習得、教授法に対する評価

1) 製作に関する知識と理解

パジャマ製作のための手順や知識に関し、授業前の知識、および授業後の理解・習得について問うた。製作手順を22項目に分け、授業前の知識については「授業を受ける前に方法を知っていましたか？」 4 知っていたし、自分でできる、3 知っていてやったことがあるが、できなかった、2 知っていたが、やったことはない、1 知らなかった」、授業後については「授業を受けて、理解・習得できましたか？」 5 そ

うと思う、4 ややそう思う、3 どちらともいえない、2 あまりそう思わない、1 そう思わない」という質問に回答させた。

結果を図3に示す。授業前、全員「知っていたし、自分でできる」と回答したのは裁断のみで、縫い代つけ、しるし付け、ボタン付け、ゴム入れは3名が「知っていたし、自分でできる」と回答した。その他の項目については、「知っていてやったことがあるが、できなかった」「知っていたが、やったことはない」「知らなかった」の回答が多く見られた。授業後のヒアリングにより、記憶が曖昧で覚えていない、ここまで基礎的なことは学習しなかったとの回答があり、着用できる被服の製作経験があれば知っているはずの基礎的な知識や技術が定着していないことがうかがえた。本授業後に理解・習得ができたかの問いに対し、全ての項目で全員から「そう思う」「ややそう思う」との回答が得られ、パジャマ製作知識や技術を習得することができた。襟付けは被服製作上、難しい箇所の一つであるが、全員理解できた。

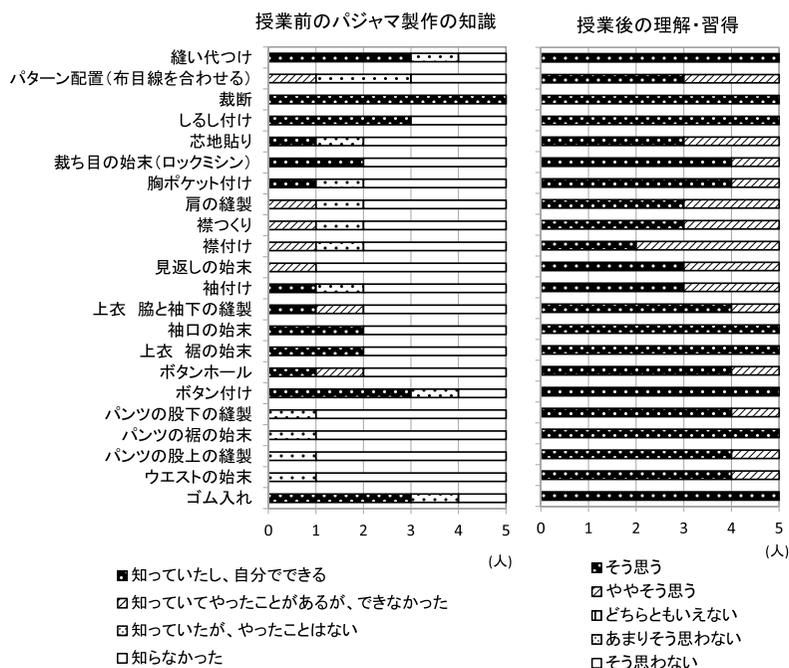


図3 パジャマ製作に関する授業前の知識(左)、および授業後の理解・習得(右)

2) 教授法の理解のしやすさについて

授業中の説明が理解しやすかったかどうか、また、やり直した箇所についても回答させ、理解しにくかった項目、やり直した箇所についてその理由を記述させた。結果を図4に示す。ほとんどの項目で「理解しやすかった」との回答が得られたが、ボタン付け、ウエストの始末については「理解しにくかった」との回答が各1名あった。ボタン付けは糸足を付ける手法を採用したが、プリントのみの説明であったため理解しにくかったようである。ウエストの始末に関しては、パンツのゴム入れ口を前中心に製作する過程で入れ口を縫わずに開けておいたにも関わらず、その部分の縫い代を押さえミシンで縫製したときに縫い代を確実に開かなかったため、入れ口が閉じた状態になったことが原因であった。

やり直した箇所については、しるしの付け間違いやミシン目のずれによる縫い直しがほとんどであったが、誤った方法によるやり直しは、「肩の縫製」2名(肩の縫い代の押さえミシンを袋縫いにした)、「ウ

被服製作実習における授業改善策の効果に関する検討

エストの始末」2名（上述のようにゴム入れ口を縫製してしまった）である。改善策として、肩の部分の押さえミシンは完成の状態を見本で確認させる、ゴム入れ口は縫い代にアイロンをかけた状態で開くことを強調して説明することが挙げられる。

受講生が7名であった昨年度の授業では、誤った方法によるやり直しがあった項目は、「胸ポケット付け」1名、「襟づくり」1名、「襟付け」3名、「見返しの始末」1名、「パンツの股上の縫製」1名であった。今年度はこれらの項目にやり直しは見られず、説明資料や教授内容の改善効果がみられた。

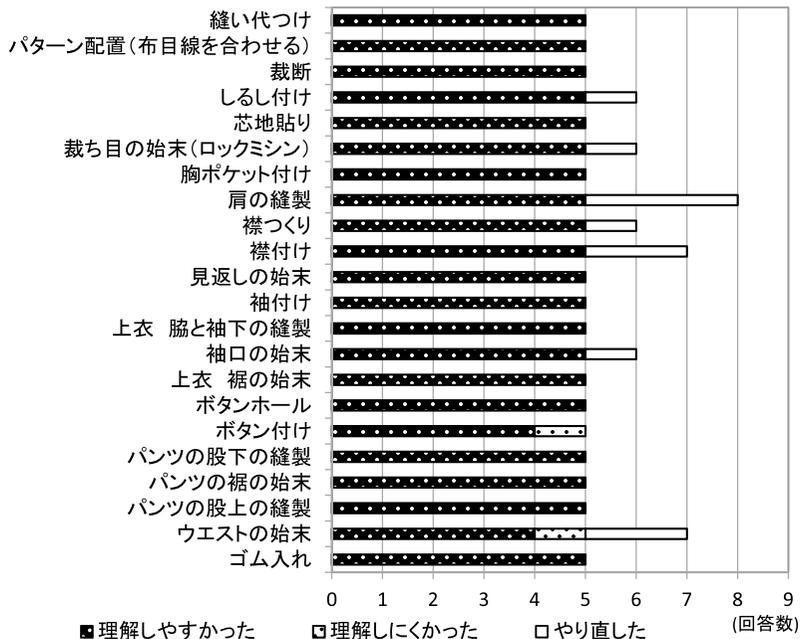


図4 教授法の理解のしやすさ、やり直した箇所に対する回答

3) 配付資料および実物見本のわかりやすさ、および復習のために希望する資料について

授業改善に向けて、配付資料や実践を含む実物見本等のわかりやすさについて問うた。図5にその結果を示す。ボタン付けについて配付資料がわかりにくいという回答が2名あり、教授法の理解のしやすさと同様の傾向がみられた。また、襟付けについては製作手順の図が部分的で、実際にどの部分を示しているかわかりにくい、しつけ糸で縫う位置は、できあがり線の内側か外側か図が細かいため「わかりにくい」という回答が2名あった。実物見本に対してはおおむね「わかりやすい」という回答が得られたことから、配付資料でわかりにくい項目は実践や実物見本の併用により理解でき、その重要性が示された。実践説明や実物見本を用いなかった糸足付きのボタン付けについては、説明資料を改善し実践を行う必要があると考えた。

復習のためにあると良いと思う資料に関する回答を図6に示す。部分見本は、襟づくり、襟付け、袖付け、ウエストの始末の項目に対して「あると良い」という回答があった。これらは昨年度のアンケート結果から必要性が示唆された部位であり、今年度は手順を追って細分化した見本を製作して授業時の説明で使用したが、これらの部分見本を十分に活用できなかったことがわかる。袖付けについては、まち針で留める際に身頃と袖をどのように重ねたら良いかわかりにくいという回答があったため、次年度はその状態の部分見本を製作する予定である。今後は部分見本を更に活用して説明し、その活用を受講生に周知する

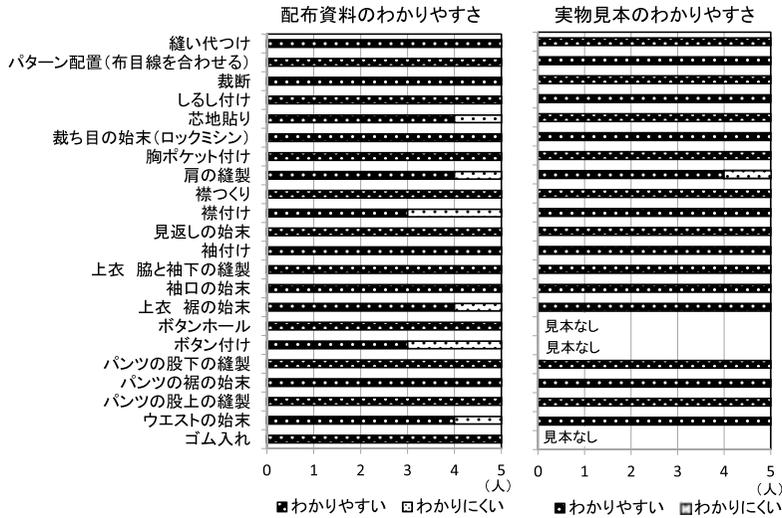


図5 配布資料、実物見本のわかりやすさに対する回答

ことが求められる。

復習のため写真や動画による説明資料があった方が良いと2名以上が回答した項目は、しるし付け、襟付け、袖付け、ボタン付けであった。その理由として、授業により各項目の製作技術は理解できたが、後から見直す場合、ルレットの使い方が初めてであったので復習したい(しるし付け)、一度説明されただけでは不安である(全般)、特に襟付けは手順が複雑でわかりにくいというコメントがあった。学生が将来教員として教授するための確実な知識や技術習得のためにも、これらの項目の写真や動画による説明資料の必要性は高いと考えられるが、写真や動画資料の制作には手間や資金の問題も大きい。一方で、現在、インターネット上には被服製作実習を担当する大学教員や一般のユーザー等が無料で公開している被服製作手順の写真付き説明や動画も多く存在する。その中から授業で取り扱う教材に該当する作業工程の説明資料を厳選し、受講生に示すことも検討の余地があろう。

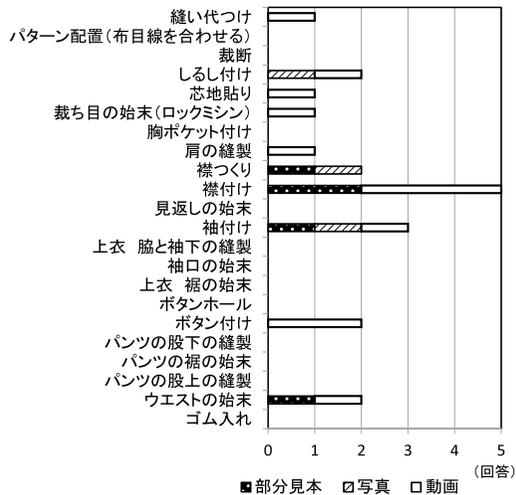


図6 復習のために希望する資料に関する回答

4) 事前の資料配布の有用性について

前週の資料配付について有用性を問うたところ、「常に予習した」0名、「時々予習した」3名、「あまり予習しなかった」1名、「ほとんど予習しなかった」1名であり、半数の学生はおおむね有用に活用していた。シャツやスカートなどの被服製作経験がある学生ほど、授業時の説明で理解できるため予習をしない傾向にあったが、被服製作経験がない学生は内容の把握のため予習する機会が多かったようである。しかし、プリントの図は部分的なものが多いため、被服製作経験がない場合はどこを説明しているか理解が難しいとの回答もあった。そのため事前に、動画による大まかな製作手順の解説も必要であると思われる。

5) 授業時間以外の作業時間について

各製作項目に対する授業時間以外の受講生別作業時間を表3に示す。結果は個人差が大きく、15回通算で最も短い学生で120分、最も長い学生で295分であった。比較として昨年度は15回通算で最も短い学生で30分、最も長い学生で340分であり、被服製作経験が多く手際よく作業を進められる学生の場合は短く、初心者学生は長時間を要していた点は共通であった。しかし、前述のように誤った手順によるやり直し箇所は昨年度より少なく、最も作業時間が長い場合でも昨年度より45分短縮されている点からも、初心者学生の授業時間以外の作業時間は、おおむね短縮できたものと考えられる。

時間を要した項目は、第7回「芯地貼り、裁ち目の始末」(最短0分～最長60分)、第13回「ボタンホール、ボタン付け、パンツの股下の縫製、裾の始末」(最短15分～最長90分)の回であった。第11回「上衣の見返しの始末、見返し～襟の端ミシン、袖付け」では4名が30分以内の作業時間であったのに対し、1名が100分掛かっていた。これは袖付けのミシン掛けの際に縫い代を巻き込んで縫ってしまい、何度かやり直したためであった。

ヒアリングから、時間を要した箇所はロックミシン、芯地貼り、ボタン付けであることが分かった。ロックミシンに関しては、昨年度は授業時間以外の作業時間が平均24.3分、今年度は平均42.0分で、昨年度の2倍近い時間が掛かっていた。芯地貼りの項目は、今年度は接着芯を薄手の織物にしたため布目線を合わせるなど扱いに時間が掛かり、同じ授業時間に実施したロックミシンかけが授業時間以外の作業になったこと、またロックミシン未経験の学生が多く、使い方に慣れるまでに時間が掛かったことが理由として挙げられる。ボタン付けは実践説明がなかったため方法もわかりにくく、地道で時間が掛かる作業であった。ロックミシンは作業時に針が折れたりカッターで手を切ったりという危険性を伴うため、授業時間内に作業時間を確保することとし、そのためには接着芯を不織布にすること、また授業内容の見直しを行い、パジャマ製作時間をもう1回増やすことを検討したい。

6) 授業の改善点の提案と実習を終えた感想について

授業改善点の提案については、間違いやすい箇所は強調して説明して欲しいとの要望があったが、それ以外は現状のままで良く、履修者数が少ないため詳しい説明や指導を受けられたことが良かったとの回答が得られた。また、実習を終えた感想から、「初めは不安や苦手意識があったが、説明が丁寧で良かった」「楽しく衣服製作ができた」「パンツが上衣に比べて簡単にできて驚いた」「また衣服を製作してみたい」など、ものづくりの楽しさや達成感を感じることができたことが窺える。

表3 各製作項目に対する授業時間以外の受講生別作業時間（受講生A～E, 単位：分）

| | A | B | C | D | E |
|----------------------------------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 第4回 採寸、型紙の準備 | 5 | 20 | 0 | 15 | 0 |
| 第5回 布地を整える、パターン配置、裁断 | 15 | 30 | 0 | 20 | 0 |
| 第6回 しるし付け | 10 | 0 | 0 | 10 | 0 |
| 第7回 芯地貼り、裁ち目の始末 | 60 | 0 | 60 | 30 | 60 |
| 第8回 胸ポケット付け、肩の縫製 | 0 | 15 | 0 | 20 | 0 |
| 第9回 襟づくり | 10 | 0 | 30 | 20 | 0 |
| 第10回 襟付け | 0 | 50 | 20 | 5 | 0 |
| 第11回 上衣の見返しの始末、見返し～襟の端ミシン、袖付け | 20 | 30 | 0 | 100 | 30 |
| 第12回 上衣の脇と袖下の縫製、袖口の始末、裾の始末 | 10 | 30 | 0 | 10 | 0 |
| 第13回 ボタンホール、ボタン付け、パンツの股下の縫製、裾の始末 | 15 | 90 | 90 | 40 | 30 |
| 第14回 股上の縫製、ウエストの始末、ゴム入れ | 10 | 30 | 20 | 5 | 0 |
| 個人合計 | 155 | 295 | 220 | 275 | 120 |

6. まとめ

中高家庭科教職免許の必修科目である被服製作実習科目について、被服製作に関する知識や技術の教授法、および、より理解しやすい授業内容や資料の改善を目的として、受講生に対する授業終了後のアンケートにより課題を把握し、昨年度のアンケート結果をふまえた改善策の効果を検討した。製作作品は襟付きの前開きシャツとズボンの組み合わせのパジャマとし、市販の型紙を用いた。受講生は5名で、全員小物製作の経験はあるものの、着用できる被服の製作経験がある学生は3名であった。本授業では、縫い代つけ、接着芯の貼付、裁ち目の始末に関する工程において、作業時間の短縮や手順の簡略化ができるよう工夫した。この内容は他の被服を製作する手順とも共通するため、被服製作実習科目全般においても有用であると考えられる。

今年度のアンケート結果から、縫製ミシン、ロックミシンともに、授業後は技術や「できる」意識の向上が認められた。ほとんどの学生は本授業終了時にはミシンの技術力は将来教員として指導ができるレベルであったが、そこまで到達できなかった学生もいたため、パジャマ製作前のミシン掛けの基本技術の確認の際に、ミシンの縫製技術の要点を確実に習得させることが必要であると考えられた。

パジャマ製作に関して、授業前は被服製作に関する知識は低い傾向にあったが、本授業で用いた製作手順資料、および実践、実物見本による説明により、授業終了後は製作に関する知識や技術を全員が習得できた。教員として他者に被服製作実習を『教える』ことができるためには、作業手順や技術に関して十分に理解していることが必要である。そのため、型紙に関する知識や各製作手順の説明では、その根拠を分かりやすく示すよう心がけた。また、製作実習では実践による技術指導も必要になるため、授業内では可能な限り実践を行い、その教授法を示した。糸足付きのボタン付けは配付資料のみで説明したが、わかりにくかったとの回答があり、配付資料の改善および実践説明が必要であった。

復習のための写真や動画の資料の希望については、しるし付け、襟付け、袖付け、ボタン付けの項目が挙げられた。これまでに被服製作経験がある学生でも被服製作に関する知識は十分とは言えず、将来教員として被服製作実習を教授する可能性を考慮すると、確実な知識や技術の習得に向けて写真や動画資料の必要性が認められた。しかしながら、写真や動画資料の制作には手間や資金等、問題も多い。現在、被服

被服製作実習における授業改善策の効果に関する検討

制作実習に携わる大学教員や一般ユーザー等がインターネット上で無料公開している被服製作手順の写真付き説明や動画も多く存在するため、それらのコンテンツの利用も検討する余地があると考ええる。

昨年度からの改善策として説明資料の細分化や実物見本を製作したことにより、やり直しの箇所は減少し、授業時間以外の作業時間も減少したと考えられ、改善効果が認められた。しかし、部分見本を十分活用できなかったことから、部分見本をしっかりと学生に提示するなどして有効利用することが必須である。配付資料の事前配布は、特に被服製作初心者学生の学生の予習に有効であった。授業時間以外の作業時間は昨年度より減少したが、ロックミシンかけは昨年度より時間が掛かる傾向がみられた。安全面を考慮してロックミシンかけを授業時間内に終了させるため、授業内容を見直し、パジャマ製作に充てる授業回数を1回増やす改善策が考えられる。そのためには教職必修科目の被服学概論と連携し、被服製作実習の第1回「人体と衣服」に関する講義内容を被服学概論で学習する方策が挙げられる。今年度把握された課題を今後反映し、更なる授業改善に取り組んでいきたい。

参考文献

- 1) 速水多佳子, 黒光貴峰 大学生の家庭科における調理、被服製作の知識・技能の習得状況にみる課題, 日本家庭科教育学会誌, 57(1), 14-21, 2014
- 2) 布施谷節子, 高部啓子 家政系女子大生における手縫いの技法の実態 被服製作の知識と過去の経験との関連性, 日本家庭科教育学会誌, 43(4), 273-278, 2001
- 3) 長山芳子 教員養成のための被服製作実習によるミシン縫製技術習得の効果—初等教員養成課程家庭専修における被服製作教育—, 福岡教育大学紀要, 第65号, 第5分冊, 159-166, 2016
- 4) 加藤博子, 大久保尚子 宮城学院女子大学生活文化デザイン学科における被服構成実習の実践と課題, 宮城学院女子大学生活環境科学研究所研究報告, 第47巻, 1-11, 2015
- 5) 難波知子, 成田千恵, 扇澤美千子 被服製作実習の改善策の検討, 茨城キリスト教大学紀要, 第50号 人文科学, 143-155, 2016

